

御殿場
高原病院新聞

創刊第1号
開院六周年記念特集
発行・編集 御殿場
高原病院新聞編集室
〒412 静岡県御殿場
市中畑字飯塚1932
TEL 0550(9)5671-3

ふれあいのチャンスをつかむ

対話のプロをめざそう

院長 清水允熙



多勢の人達が集まってくると、色々な経験と、たくさんさんの主観、そして無数の言葉も集まっ

て来ます。これらは、種々なあやを作つて揺れ動き、出来事となり、事件となります。私達の病院内でも小さな事ですが、種々な問題、事件が起きています。連絡・話し合いなどにもよりますが、多くの場合誤解などが原因となつて居る様です。

では、誤解はどうして起こるのでしょう。私達は自分の経験に基づいた主観により、意志表示を行ないます。この様な時、私達は意外に、不用意に発言します。話しかけます。

返事をします。言葉を使います。この時、内容を充分考えたいうでの言葉・話し方やとりはあまりありません。気安い仲間であればなおさらです。つまり、多くの場合、いい加減な態度での話しかして居ないのです。そのために誤解が起こってくる様です。

以上の事は、写真で説明するとわかりやすいかと思ひます。写真を撮る場合、周囲の状況をよく考えないで、ただシャッターを押しているだけではよい写真、または、写っている人達が満足してくる写真は撮れません。つまり、写真を撮るには、シャッターチャンスというものがあつて居るのです。このチャンスを無視しては、いけないのです。

言葉を使う場合、話をする場合も全く同じと思われまふ。言葉にも、話にも、シャッター

チャンスのようなチャンスがあります。この言葉や話のチャンスがずれたり、遅れたりすると、それらはあまり意味がないものになり、つまらないものになり、誤解につながつていく事が多い様な気がします。

加えて、私達の顔つき、姿勢なども、種々な事を話しかけたり、答えたりして居ます。この場合でも、やはり同じ様に、顔つきのチャンス、姿勢のチャンスがある様です。そして、これも適切でないと、正確な意志表示、相手の理解などが、出来ないばかりでなく、誤解にさえつながつていく様です。

私達は、シャッターチャンスに概当する様な言葉のチャンス、話のチャンス、顔つきのチャンスなどについて、もう一度、よく考えてみたいと思ひます。

私達の病院は、お年寄りが多勢入院されて居ます。しっかりと方、恍惚状態の方、麻痺のある方、寝たきりの方などが多勢いらっしゃいます。これらの方々に対しては、言葉のチャンス、話のチャンス、顔つきのチャンスなどを、さらに考えてあげた接し方をしてあげなければ、適切な治療、看護にはならなないでしょう。

当病院の皆さんは、これらのチャンスのプロであつてほしいと思ひます。病院の六周年、並びに、新聞の創刊にあたり、皆さんに、あえてお願いしたいと思ひます。

一年有余を省みて



婦長 荒木きみ

係、チームの和こそ貴重で、この基本的精神が原動力となって、大にひろがる夢を結ぶ原点だと思えます。

今年病院創立六周年を迎え、記念に新聞発行するので一筆と云われて、「さて」と当惑しましたが、先づは創立六周年お目出度うございます。心からおよろこび申し上げます。

今日まで幾山河越えて来たと思えます。現在入院待ちの患者さんが多勢ありますが、職員一人一人努力の結晶だと信じてあります。私もこちらに来て、一步一步手探りで歩いた長い道のりでしたが、過ぎ去ってみれば早いもので、右を左を向いているうちに、一年半の時間がすぎました。働く者にとって、組織の人間関

「感服」としか表現がみつかりません。

病人から社会変動のきざしを察知する時、それに対応する流動的な看護が考えられなければなりません。細分化されていく医学とは、いささか別の道への模索を必要としているのです。看護の底流に共通している「人間対人間の交歓」こそが、最も大切だと思うのです。

この富士の麓の環境の良い土地に建った、理想の病院の美しい職場で働く私たちは、仕事と趣味を楽しく両立させるため、日々、心豊かに、手をたずさえて邁進しようではありませんか。

「足ることを知って足る者は、常に足る」というのが、今の私の座右銘です。

患者の肉親代わりとして

二病棟主任 松尾昌代

高原病院に勤め、早五年四ヶ月が過ぎ去ろうとしています。

面接の日、一步病院に入り「あ

とても静かで、その上カラフルな感じで、病院と云うイメージがわきませんでした。

婦長さんの案内で病室を回りましたが、タタミの部屋が二室あり、「あれなんて家庭的な病院かしら」と、どこを見てもおとしよりばかりでホームの様な感じを受けました。

一年間は無我夢中で、業務のみで終わっていました。

現在の日本は余りにも急速に老人が増え、高齢者社会をむかえています。子供の看護は出来ても、老人となるとどのように接していくか分からず医師まかせとなり、すこし厄介な病気となるとすぐ入院させてしまいますが、年をとると共に環境の変化に適応する事が難しくなり、老人にとって病気で入院する事は、とてもつらい事だと思えます。

入院によって、新しい病気をひきおこし、心身共に一段と進行させる事もあります。

では環境の変化に早く適応させるためにはどうしたらいいか、初步的の事ではありますが話し相手になってやり、昔の事を思いださせながら、意欲をもたすようはた

新聞発行に期待する

らきかけてやる事だと思えます。一日一回は、顔をみながら言葉かけをしていますので、おやすみなどで一日でも顔をみないと、とても心配になります。どの患者さんも肉親の様な気持ちになっていきます。看護のかいなく亡くなってしまうととても悲しい事ですが、

その反面よくなり、寝たつきりの患者さんが歩く事が起きた時、自分からうちとけて話しをして下さる時は、この職について本当によかったです。

更に人と人とのふれ合いを大切に、明るい雰囲気のある病院にしたいと思えます。

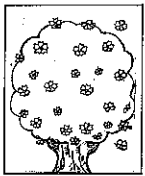
このたび、病院内で「新聞を作ろう」という計画が、実行にうつされました。大変よい事だと思われます。担当、協力、支持された皆さんに感謝します。

往々にして、仕事をする場所というものは、新しい事、新しいものに対して、積極的な雰囲気には欠ける傾向があります。いつもの決まった事を、今までと同じ様にしていればよいので、余計な事をすることは無いといった様な傾向があります。

この様な中で、新しい事を始めるということは、それなりのエネルギーの蓄積があり、また、それなりの柔軟な考え方の余裕があるということを感じさせます。

これらの考え方、並びにエネルギーは、現在の老人医療の進むべき方向へ、是非とも必要な高速道路みたいなものだからです。今後とも、立派な新聞を作られる様、お願い致します。

副院長 佐藤 宏



中学生になった栄養課

栄養士 神谷恵子

当院に勤務して、もう六年も経ようとしている。小学校で言えば丁度卒業の時期である。まだ二、三年しか経てない様に思っているのだが、月日の立つのは実に早いものである。

開院した当時は、老人食と言うことで、切り方、味付け方、献立の面に於いて気がばりが必要であった、それが、何とか試行錯誤し、今日では、余り残菜の少ない食事作りに至った様に思う。入院患者の嗜好調査又は栄養指導等でケチャップで味をつけたもの、牛乳は嫌いなので献立には出してもらいたくない等の声の一部にあった。しかし、いくら明治生まれの方が多くても、毎日、さとう、正油等で味を付けたものだけでは飽きがくるだろうと思ひ、又牛乳もカルシウム摂取するのに最も取りやすい食品として考えると、やはり両方とも使いたかった。そこで工夫を試みて献立作りをしたところ、それが患者サイドに受けた様で残菜が少なくて済んだ。

例えば、牛乳は御飯に入れて炊いたり、みそ汁、シチュー、寒天寄せ、茶碗蒸し、和えもの等に入れて使ってみた。その結果、ほとんどの患者さんが、牛乳が入っているのに気付かず、美味しいと言

って食べていた。又ケチャップの使用についても、煮物、炒め物、炒めご飯、揚げもの、焼きもの等に使った。味、色彩の面で変るからであろうか、余り残菜がなかった様に思ったが、この様に、洋風、和風、華風を問わず当院の患者さんは良く食べるので、余り老人食にこだわらずに献立作成をした方がよいのではと最近思う様になった。

ただ老人になると、味覚が低下したり、咀嚼力が弱くなるので、消化器管は若い人と違わないので、食べやすい様に調理の方法、又は食べさせ方で工夫していけば竹の子でも、ごぼうでも、こんにゃくでも出せて、又異なった多方面からの献立ができるのではないかと考えている。

本来病院の食事は、ただ供食していれば良いと言ふものではなく、医療行為の一環として実践し、又治療の目的に沿った食事内容で、個人の嗜好を尊重していかなければいけないと思う。これからもより良い食事サービスの向上につとめ、いつも患者さんに喜ばれる食事作りに励みたいと思う。

栄養課も春から中学生である。その心意気を新たにしたい今日この頃である。

快く働ける職場づくり

リハビリ担当 佐藤二郎

富士の裾野に、我が高原病院が

あります。創立以来六年経ち、患者も増え、今では病院として立派に運営出来る様になった現在です。

私達は老いたる身の患者に手をさしのべ、看護し続けています。突然急救車で運ばれて来る患者も

いれば、待ちに待って遠い所から来る患者もいます。又老人ホームから来る患者も入院して来ます。家では全然動けなかつた患者が、毎日毎日リハビリに汁を流して、

一生懸命頑張っています。手、足、身体などが麻痺し、日常生活ができなくなつた患者が多く、リハビリを行ない、少しでも自分で身のまわりの事が出来る様に、アドバイスを行なつていきたいと思ひます。

不自由な体で毎日リハビリに励んだせいか、食事が自分で出来るようになり、ベットから起きる事も、オムツが取れ、ポータブルトイレで用が足せるまで回復し、歩

くことも出来、退院して行く人も

います。その時、やはり一人一人に気を配り、リハビリを一生懸命に努力した事が役にたつたのだと、嬉しく思います。一人でも多くの患者が、身体の機能回復が出来る様に頑張つて行きたいと思ひます。

看護している私達は、如何にうまくコミュニケーションを行い、人と人の輪が上手に解け合い、患者が安心して入院しているかを思ひ、

が安心して入院しているかを思ひ、

おいしくて栄養的 家庭の味を届けたい

栄養士 江藤篤子

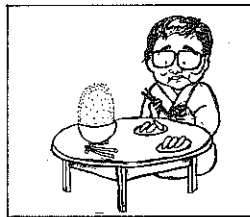
開院六周年おめでとうございま

す。私が、栄養士として当院に勤務し始めたのは、開院と同時の五年の四月でした。

当時、沼津のC病院に勤務していましたが、四月に控えた結婚を

働くことが第一です。それには、毎日毎日が大変ですが、働く者にとっては誇りです。高原病院の名も県内では知れわたり、入院してくる患者も増えていきます。私達は一職員として頑張らなければなりません。

朝、自分の仕事が決まり、いざ仕事を始める時、スタッフの息が合わなければ、その日一日がスムーズにいきません。やはり職員一人一人の、ふれあいも大切です。高原病院のこれからの発展のためにも、私達職員一同が、気持ち良く働ける様にして行きたいと思ひます。



目前に退職し、当院に再就職したのです。私自身も結婚して六年という月日が経過し、その間、二人の子供に恵まれました。また、家の新築などと人生の節目を、いくつか経験した次第です。また第三

子も八月に出産の予定で、我が家も増々当院と同じく、大きくそしてにぎやかになりそうです。私事を並べてしまいました。一層大きくなりつつある高原病院、我が子が成長する様な思いで嬉しく思ひます。

さて、当院の患者層は六十五歳以上のいわゆる御老人が主です。給与する食事一口に言えば老人食で、当然若い世代とは嗜好は異なります。高齢者の食事の目安として、いかに食べやすいか、そしておいしい、栄養的にもバランスのとれた、見た目も良いetc……。そんな事をポイントに給与している食事が、すべて皆の嗜好に合っているとは考えられませんが……。

給与後の残食の有無、集団であれば仕方がないと言うのではなく、残食の結果を素直に受けとり、より家庭的な、一人一人に合った食事への配慮をしていきたいと思ひます。まだまだ納得のいく食事作り、きめの細かい個々に合った食事への思いやりに欠けますが、栄養課として一丸となり、より良い食事作りを目指したいと思ひます。

また、一栄養士として、病院業務に携わるだけでなく、地域の二

また、一栄養士として、病院業務に携わるだけでなく、地域の二

ーズに伝えられる様な、地域に根差した栄養士活動がして行きたい。最後に、病院のより一層の御発

展をお祈り致します。

さようなら！ 高原病院

栄養課 厨房 勝又 才



窓の外には雄大な世界一の富士山が聳え立ち、閑静な里の林からは、朝早くからひねもす小鳥の囀りが聞えて来ます。ほんとうに長い閑な田園の真中に創立され、開院以来六周年、夢の様に月日は流れ過ぎ、益々御発展の高原病院、実にお目出度うございます。心よりお喜びと共にお祝詞申上ます。今後富士山と共に日本一の高原病院に発展します様祈念致します。私も開院と同時に栄養課に勤務致し、お世話になって居ります。

満六周年、毎日楽しく働かせて戴いて居り、感謝の毎日でございます。朝は五時起床で病院に出掛けて行きます。患者さんの食事作りに行きまして、時計と睨めっこで美味しく作るうと一生懸命です。患者さんへ窓ごしに時を尋ねつ食事待つ後何分と繰返し時間を聞きに来る患者さん、こんなに食事を楽しみに待って居ると思うと、張切つて作らずには居られません。●おいしいと食べる患者のえびす顔 毎日患者さんに接してつくづく思う事は、人間は健康で働けると云う事は実に尊く又楽しく、こんな幸せな事はないと思います。私も幸い健康には恵まれて居りましたので、六周年、病気で休んだ事は一日もありません。自分なりに一生懸命、精一杯働いて来まして

ので悔はございません。然し老いて遂に退職の日の近付いて居る事を考えると、実に淋しい気持ちで胸がつまる思いが致します。然し誰でも年をとらないわけには行かず仕方ありません。退職後も健康には充分に注意して、元気で老後を

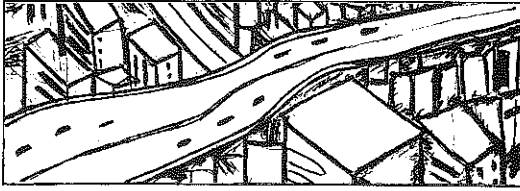
六周年を迎えて

創立六周年を迎えましたが、願れば大自然の中で、水と空気とすみきったこの地で、又、富士山、愛鷹山、箱根山と雄大な山々囲まれた御殿場に、高原病院が建設され、この病院に勤務出来たことを感謝して居ます。私も当方より勤務して居ますが、初め頃は職員も少なく皆んなで助け合いながらやって来ました。一年も過ぎ入院患者も多く成り忙しい日々でしたが、ある日患者さんの家族より、病院の皆さんはやさしくてお世話も良くして戴き、頭の下る思いですと云う言葉を、何人もの人から聞く様に成り感謝す

過し度いと思います。皆様大変長らくお世話になり有難度う御座居りました。最後にりましたが、御殿場病院の限らない発展と、従業員の御健康と御多幸をお祈り致して筆を置きます。

運転課 島村秋義

る思いでした。ほめて戴く事はいかに大事な事かと思いますが、それも全員が努力と思いやりの積重がなければ、そんな言葉は出ないと思います。運転の方も交通の不便の場所のため、患者家族と面会の方々に便利を計って行きたい、そして年間行事のリクレーションで、花見富士二合目忠ちゃん牧場等、患者さんとマイクロボスにて行きました。が、患者さんの口々に、こんなすばらしい所を見せて戴き、これでいつ死んでもいいんだと云う言葉に、胸を打れる思いがしました。これからも、少しでも時間があれ



富士山はわが恋人

臨床心理検査技師 一原 浩

は、患者さんと接する時間を作り
たいと思います。
運転業務になりますが、院内皆
さんの協力に依り、三年間は無事
故でしたが、その後年々事故が増
えています。それも特に単独事故と
接触事故が見られますが、事故の
多くは安全確認の不足とスピード
の出しすぎ、マナトの悪い事から
起きる事故が多いと思います。今
日では毎日が交通戦争と呼ばれて居
ますが、全国の統計を見ると、昨
年での一年間交通事故での死者数
が八千八百人、県内の統計を見ま
しても、一日平均で死者一名負傷

者が八十人と云う数字が出ていま
す。

年々事故の増加が続いて居ます
ので、スピードの出し過ぎ、一時
停止と安全確認は、形式的なもの
ではなく、必ず安全を確認し、落
ち着いて走る習慣をつけて減きた
い、そして無事故無違反の職場に
して、明るい仲の良い思いやりの
ある職場でありたいと思います。



朝、目覚めの悪い私は、ボーと
した頭と、半分つぶれた目でどう
にか車を走らせてます。灰色の防
音壁につつまれた東名高速道路は、
ますます眠りの世界へ誘惑するの
ですが、その時、今までの眠気が
ウソのように、パッと目がさえる
情景が広がります。白い雪をかぶ
った富士山が、朝日をあびて輝い
ているのです。白いドレスは、い
つもアレンジされて、富士の魅力
を引き立ててくれます。時にはロ
ングドレスで優雅に、またミニス
カートでキュートに、そして富士

の表情を実に巧みに演出してくれ
る雲達の流れ。

もうすっかり頭が冴えた私は、
早く富士の姿を目の当りにしたい
と、アクセルをふみこんでしま
います。

高原病院にはすばらしい壁画が
あります。診察室と喫茶室の「窓
という顔」の中に描かれた富士山
その姿はいつも私の心を引きつけ
「心和む時間」を与えてくれます
(別名「さばりの時間」といいま
す)。流れる雲は富士の言葉であり、
富士の気持であるかのように、私

はその時その時の富士の姿に語ら
いを求めるのです。ある時は、悠
然と構える富士にあこがれ、自分
の小ささを恥じ、また、勇壮な富
士の姿に、負けてなるものかとフ
アイトを燃やし、夕焼けに染まっ
た富士に「やさしさをありがとう」
とつぶやいています。

今日は雨が降って、富士山と会
う事ができません。何となく淋し
い感じで一日を過ごしました。
でも来週はどんな富士に会えるの
だろうかと考えると、ワクワクし
ています。

病院の中の思い出

清掃責任者 亀谷 マツ子

私が高原病院に勤め始めて今年
で六年になります。最初の二年は
一人で病院内の掃除をしていまし
た。まだ二病棟がありませんでし
たが、やはり一人でやるのはたい
へんでした。八時四十五分までに
出勤すればいいので、家も近いら
朝はそれほど大変ではないのです
が、病院へついて仕事着に着替え
ると時間を忘れるほど忙しく、仕
事の内容は普通の主婦のする掃除
の延長線のようなものですが、や
はり病院内の掃除は広くていろい
ろと大変でした。このころは今と
ちがって三時の休憩もなく、帰宅
時間寸前まで掃除が終わりません
でした。
しかし、二年程過ぎ仕事にも慣

れて、子供達にも進められ、自分でいつか挑戦してみたいと思っていた車の免許を取るため、教習場へ通い始めました。「四十歳を過ぎた今になって、今更…。とか、仕事をきてきて疲れてるのに、これから学校へ行って勉強をして、家に帰っても勉強して」と私にどうってかなり大変な毎日を過ごしましたが、家族の協力もあり、なんとか免許を取得したときは、大変だった毎日のことを忘れてしまうほどうれしかったように思います。それからは、送り迎えのバスで通っていました。二、三キロの道のりを自分の車で通勤するようになりました。

また、四年程前からコロニーから四人働きに来てくれて、仕事はいくらか楽になりましたし、早く終るようになりました。コロニーの子は障害児ですが、四人とも素直で言ったことは「はい、はい」と聞いてくれるのでとてもたすかりました。

そして今の二病棟ができて、東京苑からも二人働きに来て下さっています。みんなで手わけしていきましょうけんめい働いてくれるので、今では早いときで三時に終る

こともあり。そういうときは、患者さんの食事のお手伝いをしていきます。コロニーの子達も、掃除より食事のお手伝いのが好きなので、患者さんとのコミュニケーションがとれてきて、お互いに楽しいようでもてみたいと思いません。また私が休みでいなくても、しっかりとやっていくるので本当にたすかりますし、安心してまかせられることがとてもうれい

家政婦として

高原病院家政婦一同

朝八時半、病院のタイムカードを押し、仕事着に着替え、自分の担当の部屋に急ぐ。「おはようございまーす」とベットの顔を見渡すと、どの顔の目もこちらを向き、皆いつせいに「おはようございまーす」と云っているように思えます。人を慕う目、赤子が親を慕う目があります。

病の床、ここには美しい言葉で語ることの出来ない、長い人生のいきさまの凝縮があります。痛み、

仕事は、毎日が同じ事の繰り返しで大変なことも多いですが、これからもみんなで力を合わせて、病院内を今以上にきれいにしたいと思えます。また、家政婦さんやその他職員の方々にも、今までに手伝って下さったことたくさんありますが、心から感謝します。私が高原病院に来て五年、もともといろいろな思い出がありましたが、最も印象に残ったことを書いてみました。

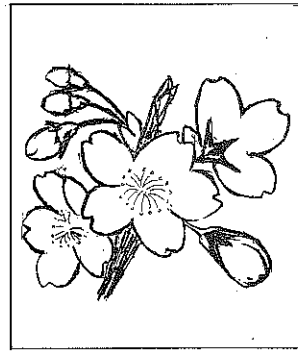
んの仕事で大笑いすることもあれば、感動させられることもあり

先日、窓辺の患者さんの処に、残飯のあるのを見付けました。一日目はちり紙でそれを取りのぞきました。次の日又残飯があるので、よく見ると干からびたごはんつぶがまわりに落ちていたので。不思議に思っ

かゆみ、動けないはがゆさに怒り、悲しみ、心を閉じた 老人の姿があります。病める老人は一人一人違います。私達家政婦の仕事は、心々に支えられていなければ、その術も生きた介護にはならないでしょう。介護は心の問題だと思えます。ですから単なる術も同じ事のくり返しでは成功するとは限りません。時には仕事をなげ出し、たくなることも、目をそむけたくなることもあります。又、患者さ

私達は、患者さんの御家族、病院内で働く多くの職員の方達と、社会人としての心のふれあいの輪を波紋のように広げることが出来たら素晴らしいと思っています。高齢化社会の時代に、私達はケア・テイカー(家政婦)を選んだことに誇りを持っており

御殿場と私



ケースワーカー

山下治子

「御殿場」という名を、私がいつ知ったのか、何故、覚えていたのかと、不思議に思うことがあります。ただ就職試験のために来た土地だと言い切ってしまうは、それで済んでしまうのですが、それは何にかふつ切れないものが、私の中にいつもあるのです。

不思議に思う時、私はこの御殿場に来る様に運命づけられていたんではないか、何か物語の筋がきの上、自分がおかれている様にさえ感じることがあります。きつと神様が私の進む方向を決めてくれている様な気がします。と感じるのは、この高原病院に就職し

て、本当に恵まれた環境の中に自分がおかれていると思うからです。普通のOLとして、一般企業などにつとめることになったとしたら、毎日が同じことのくり返してあり、考えるということせず、時間がただ過ぎ、流されていただらうと思うのです。

今現在の自分がどれだけ成長しているのかと言われると、大学を卒業した当時とほとんど変わりは無いと思います。けれど、普通のOLの人とは違うなど感じるのは、種々のことを目で見、経験させてもらっているというのほもちろんですが、人間のあり方、自分というものをふりかえる機会を常にあたえてくれるところであるということとです。私にとってその場が高原病院であり、御殿場ということなのです。

御殿場は私の人生の中で、一番思い出に残り、人生を大きく左右する場所になっていると感じる今日この頃です。自分に与えられたチャンスというものを、常に大切にしていきたいと思っております。まだまだ未熟者ですが、皆様のご指導をよろしく願っています。

わが高原病院の誇り

あふれるやさしさと思いやり

事務局長 清水淳之介

最近、外に出て感じた事は、病院は人なりということ。すなわち、治療、看護は人なりということ。これは、患者さんのことではなく、病院で仕事をする人達の質ということ、問題としてです。

まず、病院の入り口を入ります。ゴミが落ちていないか、適当な位置を占めて、植木や花が植えられているか、手は加えられているか、物陰は整理されているか、病院車の並び方はどうか。

ついで建物に入り、スリッパは汚れていないか、ドアの取手のところは汚れていないか、受付は気持ち良く応待してくれるか、長時間待っている間、どの様に待遇してくれるか、多勢の職員の状態はどうか、別際はどうか。

また、窓ガラスはきれいか、床は……などと気をつけてみると、種々な事が見えてきます。

そこで、自分が仕事をする病院を振り返ってみます。そしていつも思います。「高原病院は優秀な職員が多い」ということをです。

何故かという、前に記した様なことのどれをとってみても、他所の病院に負けていないからです。高原病院は、建物の材料、大きさなども、決して他の病院に比べてお金をかけているとは思えません。しかし、その様なものが機能し始めると、雰囲気では最高ではないかと感じさせる何かが現れてきます。これは、職員の皆さんの質、言い換えればやさしさが現われているのではないかと思われるからです。

近い将来、職員全員の、お互いへの思いやり、患者さんへの思いやりなどがあふれ出して、建物が流されてしまうのではないか、などと考えることもあります。